

令和7年度全国水産試験場長会全国大会（香川県）

要 録



栗林公園開館150周年



期 日：令和7年11月18日（火）

会 場：栗林公園 商工奨励館

香川県高松市栗林町一丁目20番16号

主 催：全国水産試験場長会

目次

1	大会の構成	
(1)	大会日程	1
(2)	大会次第	2
(3)	出席者名簿	3
2	挨拶	
(1)	会長	5
(2)	来賓	7
(3)	開催県	12
3	報告	
(1)	会長報告	13
(2)	令和6年度活動結果・令和7年度活動計画について(資料1)	16
(3)	国への要望「地域の抱える懸案事項」等について(資料2)	23
4	情報交換	
	・秋田県における内水面漁業の課題	26
5	話題提供	
	・香川県の水産業と試験研究について	28
6	優秀研究業績全国水産試験場長会会長賞表彰	
(1)	審査委員長経過報告・講評	33
(2)	副賞贈呈・挨拶	37
(3)	会長賞受賞記念講演	
	①宮崎県	39
	②宮城県	43
	③北海道	49
7	日本水産学会・全国水産試験場長会 合同シンポジウムについて	54
8	その他	57
9	次年度開催県	58
10	現地意見交換会	59
11	関係写真	60

1 大会の構成

(1) 大会日程

大会行事	開催日時・開催場所
全国大会	令和7年11月18日 13:30~17:00 栗林公園 商工奨励館
現地意見交換会	令和7年11月19日 8:30~12:00 香川大学 庵治マリンステーション（高松市） 金刀比羅宮（仲多度郡琴平町）

令和7年度全国水産試験場長会全国大会（香川県）

次 第

日時 令和7年11月18日（火）13:30～17:00

場所 栗林公園 商工奨励館

- 1 開会
- 2 挨拶
 - (1) 会 長
 - (2) 来 賓
- 3 報告
 - (1) 令和6年度活動結果・令和7年度活動計画について
 - (2) 国への要望「地域の抱える懸案事項」等について
- 4 情報交換
秋田県における内水面漁業の課題
- 5 話題提供
香川県の水産業と試験研究について
- 6 優秀研究業績全国水産試験場長会会長賞表彰式
 - (1) 審査委員長経過報告・講評
 - (2) 会長賞表彰式
 - ・会長賞表彰
 - ・副賞贈呈（地域水産試験研究等促進奨励会）
 - (3) 会長賞受賞記念講演
 - ①「環境DNAを用いたかつお一本釣漁場探索手法の開発と実践」
宮崎県水産試験場 経営流通部
主任研究員・上林 大介
 - ②「マボヤの貝毒対策に関する研究」
宮城県水産技術総合センター 気仙沼水産試験場
主任研究員 田邊 徹
 - ③「網走湖の塩分環境保全とヤマトシジミ資源の回復」
網走水産試験場 調査研究部
主査 渡辺智治
- 7 日本水産学会・全国水産試験場長会 合同シンポジウムについて
- 8 その他
- 9 閉 会

(3)出席者名簿

○来賓

	機 関 名 称	役 職 名	氏 名
国等関係機関	水産庁 研究指導課	課長	松田 竜太
	水産庁 研究指導課	課長補佐(企画調整)	岡本 康孝
	国立研究開発法人 水産研究・教育機構	理事長	中山 一郎
	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 本部研究戦略部	研究戦略部長	桑原 隆治
	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 本部研究戦略部	研究推進コーディネーター	清水 智仁
	(公社)日本水産学会	会長	東海 正
	地域水産試験研究等促進奨励会/(一社)全国水産技術協会	代表	和田 時夫

○海面

北海道	(地独)北海道立総合研究機構 水産研究本部 中央水産試験場	本部長兼場長	星野 昇
	(地独)北海道立総合研究機構 網走水産試験場	場長	畑山 誠
東北	(地独)青森県産業技術センター 水産総合研究所	所長	吉田 達
	岩手県水産技術センター	企画指導部長	藤村 崇
	宮城県水産技術総合センター	所長	和泉 祐司
	宮城県水産技術総合センター	主任研究員	田邊 徹
	福島県海洋研究センター	所長	山廻邊 昭文
東北・東海	茨城県水産試験場	場長	高橋 正和
北部日本海	秋田県水産振興センター	所長	中林 信康
	秋田県水産振興センター 総務企画室	総務企画室長	斎藤 和敬
	秋田県水産振興センター 総務企画室	主査	保坂 芽衣
	新潟県水産海洋研究所	所長	樋口 正仁
	富山県農林水産総合技術センター水産研究所	所長	辻本 良
	石川県水産総合センター	所長	木本 昭紀
東海	千葉県水産総合研究センター	センター長	玉井 雅史
	東京都島しょ農林水産総合センター	所長	中野 卓
	神奈川県水産技術センター	所長	石黒 雄一
	静岡県水産・海洋技術研究所	所長	高木 康次
	愛知県水産試験場	場長	岡田 元
	三重県水産研究所	所長	青木 秀夫
東海・瀬戸内海	和歌山県水産試験場	場長	奥山 芳生
瀬戸内海	(地独)大阪府立環境農林水産総合研究所水産技術センター	水産研究部長	山本 圭吾
	兵庫県立農林水産技術総合センター 水産技術センター	所長	山下 正晶
	岡山県農林水産総合センター 水産研究所	所長	鳥井 正也
	広島県立総合技術研究所 水産海洋技術センター	センター長	若野 真
	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課	課長	山本 浩二
	愛媛県農林水産研究所水産研究センター	センター長	渡邊 昭生
	高知県水産試験場	場長	西山 勝
	福岡県水産海洋技術センター 豊前海研究所	所長	江藤 拓也
西部日本海 九州・山口	山口県水産研究センター	所長	澁谷 賢司

西部日本海	鳥取県水産試験場	場長	石原 幸雄
	鳥取県栽培漁業センター	所長	丹下菜穂子
	島根県水産技術センター	所長	道根 淳
	京都府農林水産技術センター海洋センター	研究部長	宮嶋 俊明
	京都府農林水産技術センター海洋センター	総括主任研究員	久田 哲二
九州・山口	福岡県水産海洋技術センター	所長	秋本 恒基
	福岡県水産海洋技術センター 有明海研究所	所長	藤井 直幹
	佐賀県有明水産振興センター	所長	中島 則久
	佐賀県玄海水産振興センター	所長	山浦 啓治
	長崎県総合水産試験場	場長	森川 晃
	熊本県水産研究センター	所長	山下 武志
	熊本県水産研究センター	審議員兼次長	脇上 哲也
九州・山口 瀬戸内海	大分県農林水産研究指導センター水産研究部 北部水産グループ	グループ長	宮村 和良
	宮崎県水産試験場	場長	大村 英二
	宮崎県水産試験場	経営流通部長	神柱 武志
	宮崎県水産試験場	主任研究員	上林 大介
九州・山口	鹿児島県水産技術開発センター	所長	外城 和幸
	沖縄県水産海洋技術センター	所長	上田 美加代

○内水面

東北・北海道	(地独)青森県産業技術センター 内水面研究所	所長	伊藤 欣吾
関東・甲越	群馬県水産試験場	場長	田中 英樹
	埼玉県水産研究所	所長	小川 和泰
	新潟県内水面水産試験場	場長	佐藤 将
	山梨県水産技術センター	所長	岡崎 巧
東海・北陸	岐阜県水産研究所	所長	後藤 功一
西日本	滋賀県水産試験場	場長	酒井 明久
	高知県内水面漁業センター	所長	織田 純生

○開催県

事務局	香川県農政水産部	部長	桑原 仁
	香川県農政水産部	次長	柏山 浩史
	香川県農政水産部水産課 漁業調整室	室長補佐	藤原 宗弘
	香川県農政水産部水産課 漁業振興・流通グループ	主任技師	吉田 真子
	香川県水産試験場	場長	三木 勝洋
	香川県水産試験場 総務課	課長	新上 洋子
	香川県水産試験場 環境・資源研究課	課長	加賀田 薫
		主任研究員	小川 健太
		主任研究員	長谷川 尋士
	香川県水産試験場 増養殖研究課	課長	中山 博志
		主任研究員	原 佐登子
		主任研究員	宮城 良介
主任研究員		藤田 辰徳	
香川県水産試験場 栽培漁業センター	主席研究員	高砂 敬	

2 挨拶

(1) 会長

全国水産試験場長会会長(宮崎県水産試験場長) 大村 英二

みなさん、こんにちは。昨年度から全国水産試験場長会の会長を務めております、宮崎県水産試験場長の^{大村}でございます。

令和7年度全国水産試験場長会の開会にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

まずは、会員の皆様には令和7年度全国水産試験場長会全国大会にご参集いただき、感謝申し上げます。また、日頃よりご支援・ご指導を賜っております水産庁研究指導課長の松田竜太様、水産研究・教育機構理事長の中山一郎様、日本水産学会会長の東海正様、全国水産技術協会会長の和田時夫様、香川県農政水産部長の桑原仁様をはじめ、多数のご来賓の方々にもご多忙の中、当大会へご出席いただきまして、誠にありがとうございます。この場をお借りしまして、厚くお礼申し上げます。

さて、今年度も8月に発生した豪雨災害により、特に熊本県を中心として全国各地での被害、これ以外にも全国で多発する大雨による被害など、多くの災害が発生しております。被害を受けられました方々には、心からお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興を願っております。

昨年度の挨拶でも申し上げましたが、ここ数年間の歴代会長の全国大会での挨拶では、毎回冒頭に災害の話に触れており、これはもはやリスクというより常態化している状況といっても過言ではないと感じております。

このような異常気象の常態化の中で、それぞれの地域の水産業の成長産業化を実現していくためには、水産庁や水産研究・教育機構などとの一体的な施策や研究開発の必要性が、過去にないほど重要性を増しているのではないかと感じております。

私自身、一水産試験場長として、今まで諸先輩方が築き上げた既存の漁業、既存の施策、あるいは既存の試験研究の延長線上で胡座をかいて仕事をしてきてしまったと反省しているところであります。

このため、試験研究で言えば、10年、20年先を考えた取り組みが必要と考え、毎年^の試験研究課題の見直しに際しては、今本県にはない漁業の導入、あるいは災害に影響されない漁業を素材にしたものなど、チャレンジングな試験研究課題の設定にも取り組んでいるところであります。

全国水産試験場長会の話に戻しますが、ご案内のとおり、当会は約70年に及ぶ歴史を有しており、この全国大会は平成23年度から開催されております。

全国大会では、後ほど、審査委員長を務めていただきました北海道の星野本部長より

報告がございますが、今大会においても三つの業績を表彰するとともに、それぞれの研究について記念講演をいただくこととしております。

また、受賞者の方々には、地域水産試験研究等促進奨励会様から副賞を頂いております。今回は対象者がございませんが、日本水産学会の東海会長様のお計らいにより、40歳未満の研究者を対象とした農林水産技術会議の若手農林水産研究者表彰にも応募しております。

このような機会は、地方の研究者の一層の意欲向上につながると考えておりますので、奨励会の皆様並びに東海会長様には心から感謝申し上げます。

最後になりますが、本大会は年に一度、会員や関係者が一同に会する貴重な機会でありますので、有意義な大会となりますよう、皆様のご協力をいただくとともに、本大会の開催にあたりまして、多大なご尽力をいただきました香川県水産試験場の三木場長様をはじめ、職員の皆様方に心から御礼を申し上げまして、開会の挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしく願いいたします。

(2) 来賓

水産庁増殖推進部研究指導課長 松田 竜太

水産庁で研究指導課長を務めております松田竜太でございます。本日ここに、令和7年度全国水産試験場長会全国大会が開催されるにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

はじめに、ご出席の皆様方におかれましては、水産業の振興を図るため、日頃より試験研究および技術開発の推進にご尽力いただき、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

また、本全国大会の開催準備にご尽力いただいた香川県の関係者の皆様に、重ねてお礼申し上げます。

さて、昨今の劇的な海洋環境の変化による水産業全体への影響に鑑み、本年6月に自民党の水産総合調査会および水産部会が、小泉前農水大臣に「水産政策の新たな展開に関する提言～豊かな浜と強い漁業を未来につないでいくための水産業強靱化計画の策定に向けて」という提言書を提出されました。この提言書の冒頭には、「これまでと同じやり方では我が国の漁業は成り立たない、変革しなければ生き残れない、まさに漁業は危機的な状況にある。」とあり、その対策として、第一に「海洋環境変化の的確な把握と精度の高い資源評価に基づく資源管理の早急な実施」と記載されています。

皆様方におかれましては、かつてないほどに獲れなくなってしまった魚種があったり、突然豊漁となる魚種があるなど、これまで以上に将来の予測が難しく、調査研究や技術開発を計画的に実施することには大変なご苦労があることと思います。昨今では、スルメイカの漁獲枠の問題や、特に瀬戸内海におけるカキの大量へい死など、例を挙げればきりがありませんが、ご紹介した提言書の一番初めに記載されているとおり、地道に継続いただいている資源調査や技術開発は、これまで以上にその重要性が高まっていると考えております。

我が国が引き続き資源管理の科学的根拠となる資源調査・評価を着実に実施するとともに、その高度化に取り組んでいくことは、関係都道府県の水産試験場の皆様のご協力なくしては成し得ません。水産庁としましても、関係都道府県のご協力を仰ぎながら、これまで以上に皆様と連携して取り組んで参りたいと考えております。

最後になりますが、本日会長賞を受賞される方々をはじめ、ご出席の皆様方のご活躍とご健勝、また本日の大会が実り多いものとなるよう祈念しまして、私のご挨拶とさせていただきます。

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 理事長 中山 一郎

皆様こんにちは。本日は令和7年度の全国水産試験場場長会全国大会開催、誠におめでとうございます。そしてお招きいただきまして、誠にありがとうございます。私ども普段より大村会長様はじめ場長会の皆様、それから今回この会を運営されている三木場長様はじめ香川県の方々には、本当にいつもお世話になっております。ありがとうございます。

現在、水産をめぐる状況というのは、非常に大きな環境の変化、それも大きな地球環境の変化だけではなく、さらに社会全体の変化も大きくなってきているところがございます。食糧安全保障の観点からも大きな転換点を迎えているのではないかとというふうに考えているところがございます。

さらに先ほどありましたけれども、日本は、震災、豪雨と脆弱な環境の中にあります。

7月30日には遠いカムチャッカ半島付近の地震に伴う津波による養殖施設への被害までありました。それから8月、9月にかけては局地的豪雨、それから突風、台風被害、その他日本各地でも大きな被害があり、水産全体にも大きな影響があります。被害に遭われた方々にはお見舞い申し上げます。研究サイドでもこれらの対応として、何か備えていけることがあるのではないかと強く思っているところでもあります。

ここで少しお時間をいただきまして、我々の情勢報告をごく簡単にさせていただきたいと思います。まず、一つ目でございます。令和7年度の全国水産業関係研究会の推進会議です。これは、水研機構が開催する会議でございますが、来年の2月17日（火曜日）、ビジョンセンター品川で開催することとしましたので、ぜひともご参加をお願いしたいと思います。今回も対面とWeb、両方で行います。以前は場長会の幹事の方々のみが対面でしたので、数少ない会議でしたけれども、Web併用ということで昨年も数多くの方々にご参加いただきまして、誠にありがとうございました。ぜひとも皆様のご参加をお願いしたいと思っております。

二つ目です。10月15日に水素燃料電池漁船「ZERO-E 黒瀬」という船が就航し、10月16日より実証試験を開始したところがございます。この船は、水素を供給して空気中の酸素との化学反応で発生した電気を使って推進モーターを稼働させる、電動の船でございます。また、余剰電力はリチウムイオン蓄電池に蓄電することができまして、スラスタだとか給餌用ブローアをこの電池で稼働することができるという仕組みになっております。給餌作業のほとんどがゼロエミッション化で行けるといって船でございます。これが就航したということで、水産業はCO2排出が非常に大きな産業でございますけれども、「ZERO-E 黒瀬」が出来上がって実証に向かったというのは大きな一歩だと思っております。

三番目としては第22回成果報告会ですけれども、9月19日、横浜市にある神奈川県公会堂で開催いたしました。対面は83名、Webは198名、総勢281名のご参加をい

いただきました。皆様と機構の研究成果について活発な情報交換ができたというふうに思っております。

また、10月2日には水産増養殖産業イノベーション創出プラットフォームの中の令和7年度勉強会・技術提案会を開催いたしました。こちらは対面45名、Web75名、総勢120名の参加をいただきまして、2題の講演、7つの技術提案が行われて、そのあと、非常に活発な意見交換が行われました。まさにこれは新しい産業を作るといったプラットフォームの中での話で、水産業とあまり関係ないと思われる企業の方々も数多く参加していただいたという会でございます。また、提案会開催後の交流会では参加者同士のコミュニケーションから新たな研究の種が生まれたようでございます。

四番目ですけれども、本年度のPICESの本会議が、今年は日本が開催国ということで6か国持ち回りですが、11月8日から16日、先週横浜で開催いたしました。今回は70名近い参加者ということで、PICES 始まって以来の参加者数で大盛況でございました。PICES は日本、カナダ、中国、韓国、ロシア、米国の6か国の政府や研究機関などが参加する機関で、北太平洋における海洋科学研究の推進、海洋環境、気候変動、資源、生態系、人間活動の影響に関する科学的知見の共有と交換などを目的とした会議でございます。さらに、日仏海洋学会と水研機構で共同シンポジウムを三重県の鳥羽で11月26日、来週から30日まで予定しているところで、昨年引き続き機構として国際関係も力を入れているところでございます。東南アジアのSEAFDECなどMOUを締結した海外機関とも連携して、海は世界中つながっていて同じような被害、変化があるということで連携を強めているところでございます。

そういうところで、本日は本当に盛大な全国大会おめでとうでございます。水産のさらなる振興に向けて、我々はやはり現場との絆が最も大切だというふうに思っていますので、場長会の方々との連携をさらに深めるためにも、今回のこの会議が実り多い会となることを祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。本日はおめでとうございます。

皆さん、こんにちは。日本水産学会会長の東海でございます。令和7年度全国水産試験場長会全国大会の開催、誠に喜び申し上げます。大村会長はじめ場長会の皆様、また今回の会議をご準備いただいた香川県水産試験場の皆様に、お礼申し上げたいと思います。また、このようなご挨拶の機会をいただきまして、ありがとうございます。

すでに多くのご挨拶中でありましたように、水産業を取り巻く環境というのは非常に厳しい中、全国の水産試験場長会の皆様、各試験場で解決に向けてそれぞれ試験研究を進められていると思います。その中で一つ、うれしいお知らせをさせていただきます。まずは、昨年度この場長会賞を受賞された愛知県水産試験場の稲葉さんが、今年度の若手農林水産研究者表彰、農林水産技術会議会長賞を見事に受賞されたということでございます。公設試では、農業関係、園芸、その他畜産関係ではかなり受賞者が出てきているのですが、実は水産試験場からは、私の記憶する限り今まで受賞者がいなかったところですので、今回初めて受賞されたということで、ぜひ、場長会賞を取っているからというわけではなく、すばらしい研究があれば、各県の水産試験場から若手を推薦していただき、賞を取っていただき、多くの方々に、身内含めて我々大学の学生たちにも見せてやってもらいたいと思っております。

それは後ほどにも少し触れたいと思いますが、学生たちが「水産試験場がどういう仕事をしているのだろう」「何が水産業の中で課題になっているのか」、大学の先生達の授業が悪いのかもしれないですが、ちゃんと伝えきれていないのかもしれない。そうしますと、やはり学生たちが将来、自分の仕事をどこに求めようかという時に、水産試験場というところが目に入ってくるように、活躍している姿をどんどん見せていただくことが、今必要ではないかと思っております。

日本の研究ということになりますと、マスコミなどでもよく取り上げられていると思いますが、残念ながら最近、日本の研究というのは世界の中で存在感が薄れていると言われております。実際、日本の水産学においても、過去には留学生が日本の水産学に憧れて日本に来たという時代がありましたが、今はどうもそういうふうには見えません。残念ながら、世界の研究、つまり論文の質を比べると、日本も頑張っただけ論文を出しているのですが、論文がやや見劣りしてしまう状況がきております。

研究という意味では、あくまで私の意見ですが、過去においては非常に現場で課題解決の研究をしっかりしてきた、それが世界で認められて、日本の水産学は尊敬されていたというふうに思っております。そういう意味では、水産学というのは応用学問でございますので、今の水産の現場で課題解決に取り組んでおられる水産試験場の皆様方と、今、研究というのは様々な遺伝子やゲノム、それからビッグデータ、あるいはAIなどを含めて、研究を進めなくてはいけなくなってきており、一人の研究者だけではそういった課題解決に取り組むのが難しい状況になっています。そういった場で、研究者をつ

なぎ、研究を進めていくというのは、まさに水産学会のような学会組織の一つの役割だろうと考えております。そのように、全国水産試験場長会の皆様との連携を図るために、私も今回4回目ということでここに出席させていただいております。

そういったこともあり、今年度末には日本水産学会の春季大会が東京海洋大学で開催されますが、その際、全国水産試験場長会大会と水産学会理事会の合同シンポジウムをぜひ開催させていただこうということで、現在計画しております。詳しい話は後ほど星野副会長からあると思います。こうしたことを含めて、学生たちに今、地域の課題は何か、そしてそこに水産試験場はどうやって取り組み、またどうやって悩んでいるのか、次の若い世代がそこにどういったアプローチをし、自分たちに何ができるのかと、そういうことを考える機会をぜひどんどん作っていきたいと考えております。

日本水産学会では、実は学部生の大会参加については無料で参加できるようにしており、そうした形でぜひ若いうちに試験研究の大切さや面白さを知ってもらいたい、またそれを職業として考えたときに水産試験場というのが大きな地域を支える職場になるようになればいいかと考えております。

最近では、水産学会では若手の会が活発に活動しており、シンポジウムやナイトポスターセッションを行っています。その場に水産試験場から若手研究者の方にも来ていただき、仲間づくりが非常に盛んだと考えております。学会・理事会としても、若手の活性化は非常に重要だと認識しており、大いに支援したいと考えております。

また、本日も場長会の会長賞を含めて、こうした表彰があることで、研究者の方々、若手だけでなく多くの方々が活性化すると考えております。試験研究の活性化、それが学生たちにとっても魅力的な研究の場と言えるようになっていけばと考えております。

ぜひ、こうしたことも含めて、大学、試験研究機関、水産試験場、そして学生が働きたいと思うような場になっていくように、ぜひ連携を深めていきたいと考えております。

本日、この全国大会によって皆様方の連携が深まり、また水産学会も連携に加わらせていただき、ますます活発になって水産業界を支えていく、この場が盛会になることを祈念申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。本日はおめでとうございます。

(3) 開催県

香川県農政水産部 部長 桑原 仁

皆さん、こんにちは。香川県農政水産部長の桑原でございます。令和7年度全国水産試験場長会全国大会開催にあたり、開催県を代表して一言ご挨拶申し上げます。

ここ香川県において令和7年度全国水産試験場長会全国大会を開催いたしましたところ、ご多忙の中、ご来賓の皆様をはじめ、全国各地の水産試験場長の皆様にご臨席賜り、心より歓迎申し上げます。

全国水産試験場長会におかれましては、平素より都道府県の水産試験研究機関の連携強化および情報交換の促進を図り、それらの成果を中央の水産行政や研究機関等に発信されるなど、地方水産試験研究の持続的な発展に多大なるご貢献をいただいておりますことに、厚く感謝申し上げます。

さて、本県は瀬戸内海の東部に位置し、多種多様な漁業が営まれております。中でも養殖業が盛んで、昭和3年に世界で初めてハマチの餌付けに成功し、ハマチ養殖の発祥地ということで、ちょうど3年後の令和10年に100周年を迎えることとなります。県魚のハマチと県木のオリーブをコラボレーションする研究に取り組み、平成20年には「オリーブハマチ」を生み出しました。近年はオリーブ水産物として「オリーブマダイ」や「オリーブサーモン」などへも展開しております。

近年、気候変動により水産業を取り巻く環境は厳しさを増しており、水産業を巡る諸課題を解決するには、基礎研究から漁業現場に対応する幅広い研究開発の取り組みが必要不可欠でございます。こうしたことから、全国水産試験場長会の役割が今後ますます重要になると考えております。

また、会の後には香川の食も楽しんでいただければと思います。本県は水産物以外にも「うどん県。それだけじゃない香川県」をキャッチコピーに、オリーブ牛、オリーブ夢豚、オリーブ茶など、オリーブを使ったさまざまな特産品がございます。また、骨付鳥や和三盆を使ったお菓子など、多様な美味しいものもございます。皆様にこれらを存分に堪能していただく機会がありますことを祈念申し上げ、簡単ではございますが、開催県のご挨拶とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございます。